

2019/8/23



(蝉 (せみ))

今朝、自分の部屋の掃き掃除をしました。

掃き集めたごみの中に小さなニイニイゼミの亡骸(なきがら)がありました。

昨日の朝はなかったので、恐らくそれ以降、自分の部屋の中に迷い込んで出られなくなり、息、絶えたのでしよう。

それを見て、自分はとても悲しくなりました。

今の自分にたとえたのです。

蝉は、外界にでるまで、「年から13年土の中で過ごします。そののち、やっとのことで外界にでも、生きられるのは、せいぜい1週間から2週間。

そのわずかな期間も、自分の部屋で起こったような事故にあえば、さらに短くなる。

それを思うと、セミが哀れました。

それを、今の自分に重ねました。

しかし、それではいけないと、

「そんな身の上ではあっても、少なくとも子孫を二人残したではないか。その子孫の内の一人在りまたその先の子孫を二人、のこしている。自分の役目はそれで充分」

そう自分に言い聞かせようとして、更に物悲しくなりました。

そこまで遡って自分を納得させなければいけないほど、弱り切っている今の自分が、悲しくて、悲しくて、なりませんでした。

その後、自分はしばらく床の上で天井を見ていました。

そして、

「自分はその「感傷」にまみれたくない」

そう思いなおして起き上がると、その「空蝉(うつせみ)」をごみの中から拾い上げて「埃(ほこり)」を払い、それ以上まみれないよう戒め(いましめ)と供養を兼ねて机の上に置きました。